

映画「未来シャッター」インタビュー 地域と人をつなげる映画、制作・配給に新たな手法

観賞後、来場者が語り合う場

東京都大田区蒲田、墨田、神奈川県藤沢市を中心舞台にした映画『未来シャッター』。3地域以上の関係企業や交通機関、関係者などが制作費の出資からロケ撮影現場の提供、キャストとしての参加など、さまざまな形でかわりながらプロのカメラマン、照明技師、編集マンなどによるサポートのもとで製作され、6月試写、7月から公開となる。製作プロデュースを担当したNPO法人ワップフィルムは、映画を「課題解決のための手段」と位置付け、製作・上映方法など、ユニークな形態を採る。同NPO理事長で『未来シャッター』監督の高橋和勸氏、プロデュサーの菊地真紀子氏に同映画の狙いなどについて聞いた。

プロと地域の協働製作態勢

映画『未来シャッター』映像制作を進めている。には「シャッター」は、現代人が抱えるさまざまな「境界線上の壁」を指している。そうした壁を乗り越えられずにいる「境界人」(マーシナルマン)である3人の主人公が、地域の人たちとかわりながら解決の糸口を探っていく。

撮影、照明、主役キャスト、ナレーションなどの主要な制作陣にプロを配し、劇場上映にも堪える、クオリティーの高い

「下町ホブスレーネットワーク」、深海探査艇「江戸っ子一号プロジェクト」の関係者や、藤沢市の観光客を一手に担う遊行寺の法主も登場している。

照明担当で参加した照明技師の西野哲雄氏は「一般の人の場合、光を当てすぎると、せりふがとんでしまうことがある

地元企業、信金が協力参加

ワップフィルムは、「市民による市民のための映画製作を通じ、意見交換などのコミュニケーションの場へと発展・構築していくこと

加えていくことで、いろいろなつながりができていく」と話す。

映画の配給方法もユニークだ。観客は映画を鑑賞した後、テーブルを囲んで話し合いをするのが上映の基本フォーマット。観客はそこで、自分たち



(右から) 高橋監督、菊地氏、西野氏、吉田氏

を狙いとしている。菊地氏は「映画の楽しみ方」に、『作って楽しむ』『見たい』『楽しむ』という要素を

企業や団体が有料で作品を借り、上映会を開催する。既に、地域企業と

監督は「上映するだけでは、映画として未完成という。『映画のハッピーエンドを見て、自分の課題も解決したように満足するのではなく、映画のテーマを自分たちの問

題としてとらえ、解決の糸口を自分たちで考えてもらいたい。未完成の状態でも人に委ねることで、もしかすると自分の考え以上のものができるかもしれない。スクリーンを隔てた作り手と観客という関係ではない、新しい関係ができるかもしれない」(高橋監督)

菊地氏は今後の展開について『未来シャッター』を全国46都道府県で上映し、英語字幕版も制作する。それを、それぞれの地域、コミュニティで自分の作品を製作するきっかけ作りしていきたい」と話す。